

糸紡ぎの少女

2016.12.30 Sanji*Nami FreePaper

[足りん]<http://legend.en-grey.com>

こまつな(@kmt_n_05)



むかしむかしあるところに、一人の少女がいました。家族のいない少女は、森の中の小さな小屋でひとり糸をつむいでいます。たくさんつむいだら、街へ売りに行くのです。まいにちまいにち、たくさん糸を少女はつむぎました。

彼女が膝に頭を乗せている。目を閉じて、髪と同じ色の睫毛が細かく震えている。無造作な切り口で束になった前髪をさらさらと撫でるとナミさんの口がむずむず動いた。「くすぐったい」と彼女が言う。ナミさんの前髪をつまみ上げ、指先でこねるように毛先をいじった。柔らかに、潮風のおいがする。

ある日少女が街に糸を売りに行くと、ひとりの男に出会いました。「かわいそうに、こんなに傷だらけの指で働いてるんだね」男は少女を自宅に案内し、暖かい紅茶とクッキーを用意しました。初めて食べる甘いお菓子に、少女は涙を流して喜びます。

額にじかに触れて、つるりと冷たいそこに指の腹をあてる。目を閉じたままじっと動かない彼女の顔を、真上から「こぞとばかりにまじまじ見つめた。つんと上を向いて尖った鼻先を咥え

るみたいに口づける。「なにすんの」とナミさんはくすくす笑った。

男の家には少女と同じ年の女の子がいました。男によく似た目元の女の子は、少女に笑いかけます。男は少女に言いました。「これからはここで暮らしなさい。もう糸をつむぐ必要はない。学校に行かせてあげよう。ともだちもできるだろう」

不意に彼女の手がおれの頬に触れた。指の背で、頬から顎にかけてを撫でられる。「ざらざらする」と不満げに眉をしかめるので笑ってしまった。ナミさん本当に猫みたいだね、とつい口にする彼女が「にやあ」と言っ、少し恥ずかしそうにぱたりと手を顔の上に落とした。

少女は首を振りました。「私が糸をつむがないと、街の人が困ってしまうわ」男が言います。「君がつむがなくても、代わりはいくらでもいる」少女は困った顔で言いました。「私が世話をしないと、繭を作る蚕が死んでしまうわ」男は言います。「もう糸をつむぐ必要はないのだから、蚕の世話は必要ないんだ」

彼女の腹の辺りに手を置いてそつと撫で上げると彼女の唇が少し開いた。眠い？ と訊いてみると「少し」と囁くみたいに彼女が答える。「でも」と彼女は目元を隠したまま続けた。「もつたいないから寝ない」背後の水槽をひときわ大きな魚がのたりと泳いで通り過ぎていく。青い部屋の中に影が差して辺りが暗くなったその隙に、唇で唇に触れた。

少女は続く言葉を知らず、黙って首を振りました。そして逃げるように、男の家を走って飛び出しました。長い坂を登って家に着くころには、頬が真っ赤になっています。その頬の上を、涙が転がり落ちました。男の優しさになにひとつ応えられなかったことが、とても悲しかったのです。

めいっばい腰を折り曲げて覆い被さるようにしなければ届かなかった。ナミさんが少し顔を持ち上げて、こちらの唇にくつつけるようにしてくれる。その協力体制に嬉しくなつて、腹に乗せたままだった手を服の裾から中に忍び込ませて背中を直に撫でた。さらさらと心地よく触れた。一層深く唇をつける。

少女は涙を拭つて、ぼうせき機の前に座ります。そして、いつものように、心を込めて糸をつむぎはじめました。それはそれは綺麗な白い糸が、長く長く伸びていきます。鋭い針はときどき少女の指を刺しましたが、今日の悲しみも、優しさも、糸をつむいでいるとすべてが白く消えていくのです。

そのときどん、と頭上で音が響いて、おれたちは同時にはつと目を開けた。至近距離で視線を合わせたまましばらく固まったのち、ナミさんが服の中に入り込んでいたおれの手をそつと掴んで引き抜いた。

「誰かお腹でもすかせてんじやない」

「本日の営業は終了しました」

アクアリウムバーの上は食堂だ。誰かのうろつく足音がずんずんと響いている。

「とか言つて、気になるくせに」

「クソ、クソー」

悔しまぎれにぎゅうぎゅうと彼女を抱きしめるとナミさんは「はは」と笑つておれの背中に腕を回した。そのまま抱き起すように彼女を持ち上げソファに座らせる。

「短い逢瀬だ」

「頑張ってコックさん」

「もう一回言って」

「頑張ってコックさん」

「よっしゃ」

勢いをつけて立ち上がり、彼女に手を差し伸べて引っぱり上げる。その拍子にもう一度抱きしめて、肩のあたりにキスもした。

「ねえさっきの話、続きはないの」

「ないよ、あれでおわり」

「サンジ君も忘れられる？ 料理してると、いやなこととか、

悲しいこととか」

え、と目を丸くした。

「考えたことねえなあ。あ、ま確かにそう言う意味では余計なこと考えなくてすむかもしれないねえけど」

ふーん、と興味があるのかないのかな返事をして、ナミさんはいつまでもくつついているおれを引っぱがすようにぐいと押した。

「早く行ったら。私ももう寝るから」

「終わったら部屋行つていい？」

「だめ。今日はロビンもいるから」

「ちえー」

「おやすみ」と彼女が背伸びをする。触れた唇が音を立てて離れる。

「また明日ね」と彼女が言うのと、明日の訪れがいつもひどく遅い。

F i n .